

平成 29 年度第 2 回高知県医薬連携及びセルフメディケーション推進協議会
議事録

日時：平成 30 年 2 月 20 日（火） 19：00～21：00

場所：高知共済会館 4階 浜木綿

出席者：高知県医薬連携及びセルフメディケーション推進協議会委員 8名
事務局 4名

1. 開会挨拶

医事薬務課 浅野課長より開会の挨拶があった。

2. 平成 29 年度事業報告について

(1) 高知家健康づくり支援薬局を活用した県民の健康づくりの推進について

事務局より、平成 29 年度事業報告があった。

(概要)

- ・薬局来店者を対象に支援薬局の認知度やお薬手帳 1 冊化等についてアンケートを実施した。認知度はまだまだ上げていけないといけなく、また、薬局来店者へのアンケートであるのに、お薬手帳を複数持っているという回答をした人もいた結果であった。

◆意見等

- ・最近の薬局は「お薬手帳持っていますか？」と声をかけてくれるが、高齢になればなるほど持って行くのも忘れてしまう
- ・お薬手帳一冊化について啓発の仕方は予算面もあると思うが、効果があがるように今後どう PR していくかを考えていけないといけなく。

(2) 在宅医療への薬局・薬剤師の参画の推進について

～高知家お薬プロジェクト推進事業～

事務局より、平成 29 年度事業報告があった。

(概要)

- ・平成 28 年度から在宅服薬支援のため、高知家お薬プロジェクトとして取組みを開始し、今年度は中央東福祉保健所管内と高知市をモデル地区として実施した。関係団体へは役員会や総会、研修会等の様々な機会を通じて事業説明や協力依頼をしている。
- ・高知家お薬プロジェクトでは事業内容が見えづらいという意見もあり、在宅服薬支援事業「高知家お薬プロジェクト」という名称に軌道修正した。今後はこの名称で進めて行く。
- ・多職種連携ツールである「薬局への残薬報告書」については、第 1 回目の本協議会において、実際患者さんは薬の飲み残し以外にも飲み過ぎという問題もあるという実情をお伺いした結果、飲み残し薬以外のことについても、薬について気になることは何でも記

載できるよう様式をバージョンアップした。

- 多職種から薬局に集まった事例は79件、これらの事例の年齢層は70歳以上が約80%、薬局への情報提供者としては介護支援専門員が一番多かった。
- 集まった事例の残薬発生原因については、理解力低下が73.4%、次いで多剤投与が43%という結果であった（複数回答あり）。理解力低下の具体としては認知、認識機能低下によるものが約90%を占めていた。多剤投与の具体としては薬の数が多すぎて整理がつかないものが約80%、複数医療機関から薬をもらっているために整理がつかないものが約50%弱を占めていた。
- 多職種へのアンケートはモデル地区の訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所に協力をお願いした。今後、医師や歯科医師等の意見も聞けるようアンケートへの協力をお願いしていきたい。

◆意見

- 患者さんは、①全体的に薬は飲みたくないという考えの人、②必要な分だけ飲みたい人、③薬に依存している人の3パターンに分かれていると思う。①は副作用がはっきりわからない等の薬に対する理解不足を感じている。②は医師が処方している薬であるが自分で調べて自己判断をして不要だと決めてしまっている。③は下剤や痛み止め等を自分でコントロールせず飲んでいる。処方された薬がどのように効くかということを説明する等、薬剤師に入ってもらったら状況が変わると思うことがある。

在宅医療に携わる立場からすると、このプロジェクトにより近隣の薬局へ気軽に相談できるようになってきた。また、薬剤師にも適切に対応していただいていると感じており、周りの看護師へ「薬局が相談にのってくれるよ」と話したり、この取組みのことも団体で報告している。

◆質疑

- Q 病院薬剤師と薬局薬剤師の連携について現状はどう進んでいるか。
- A 病院の薬剤師の人員不足もあり、薬局とあまり連携がとれていない状況であるが、今後は連携していきたい。
- Q 高知市で運用が開始された入退院引き継ぎルールはどのような成果が見えてきているか。
- A 引き継ぎルールにより、看護師からケアマネにスムーズに情報がいくようになったと聞いている。今後、顔が見える関係の中で、細かな軌道修正をしながら、運用していく。また、このルールがうまくまわりだした時に、薬局・薬剤師にも入ってきてもらうようになれば、在宅服薬支援事業「高知家お薬プロジェクト」ともつながっていくのではないかと考えている。

(3) 平成30年度事業計画案について

事務局より計画案の説明とともに関係団体からの取組計画の説明があった。

(概要)

- ・高知家健康づくり支援薬局として現在 262 件の薬局が認定を受けている。 薬剤師会は、支援薬局の認定を受けたい薬局のサポートを行っているが、今後、地域偏在なく県内 80% の薬局が認定を受けて支援薬局として取り組むことができるようなサポートを継続していく。認定薬局数も必要であるが、内容の充実も必要である。
- ・県民への高知家健康づくり支援薬局の取組みを見える化として、薬剤師会としては高血圧対策を進めていくことを検討している。まずは家庭での血圧測定と記録の推奨、できない方へは薬局で測定していただき状況に応じて医療機関を受診勧奨していく取組みを想定している。
- ・在宅服薬支援事業「高知家お薬プロジェクト」は来年度、県全域の薬局で取組む。薬剤師会支部長へ事業説明をして地域の実情に応じた取組みになるように、また、地域の薬剤師が外向いて多職種へ取組み説明をしていけるように準備を進めていく。また、小規模薬局が連携して在宅訪問等に対応できる高知型薬局連携モデルも進める。
- ・来年度の新事業として、国保の都道府県化を見据え、レセプトデータを活用した重複投薬の是正（重複投薬の通知等）を医療保険者 3 者（国保、協会けんぽ、後期高齢者医療広域連合）と連携して取り組む。この取組みは、在宅服薬支援事業「高知家お薬プロジェクト」の多職種からかかりつけ薬剤師・薬局へのつなぎにも関係している。多職種が患者さん宅を訪問した際に、「お薬に関する通知が届いていませんか？」と声掛けをしていただくよう周知していく。
- ・患者さんがかかりつけ薬局を持ち、そこで服薬情報を一元管理することが薬剤師としても求められており、お薬手帳を一人 1 冊にまとめてしっかり管理することを薬剤師会でも引き続き広報していきたい。医師会を中心とした 4 師会では「かかりつけ連携手帳」の運用を中央医療圏で開始した。アナログではあるが、まずはそこから服薬情報の一元管理を進めて行く。

◆質疑（レセプトデータを活用した重複投薬の是正について）

Q レセプトには医薬品名が載っているのか。

A 載っている。保険者が見たら医薬品名もわかるようになっている。

Q かかりつけ薬局の選び方のアドバイスが求められることもあると思うが、どのようにアドバイスをしているか。

A 薬剤師会は「薬と健康の週間」の取組みとして、かかりつけ薬局に関する新聞広告を実施し、新聞を見た県民から問い合わせがあった。「この薬局がいいですよ」とは回答はできないので、自身の気に入った薬局や薬剤師がいればそこにする、職場等から近い場所など生活スタイルも一緒に考えて選んでみてはどうかと回答しているところ。

Q レセプトデータを活用した重複投薬の是正について、成果はどのようにはかっていくか。

A 今後、医療保険者等関係者との協議の場を設ける。その中で、事業評価等の指標を検討していくこととしている。

◆意見等

(レセプトデータを活用した重複投薬の是正について)

- レセプト分析に時間がかかるので、患者さんの元に通知が届くときには過去のことになっている可能性がある。できるだけリアルタイムで、時差のないように進めて欲しい。
- 残薬を減らすのが難しい。医師同士で重複しているかどうかということは分かっていないのではないかと思う。他の医療機関で出ている薬のことを気にして処方する医師と気にせず処方する医師がいるのが実際であると思う。

(在宅服薬支援事業「高知家お薬プロジェクト」について)

- 在宅訪問をすると、処方された薬以外にもドラッグストアで薬を購入して服用している人も多い。こういう市販薬についても一緒に薬剤師に管理をして欲しい。

(3) その他

- 次回開催日時について
平成 30 年 6 月頃予定
- 委員の委嘱について
現委員の任期は平成 30 年 6 月 12 日まで